

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目 インドネシア現代美術と美術家
 ～つくる・買う・支援する主体をめぐる民族誌～

氏名 廣田 緑

論文内容の要旨

本論は、芸術とそれを取り巻く活動を主題化したこれまでの先行研究において看過されがちであった「感性」に注目しつつ、インドネシア現代美術と美術家に関する民族誌的記述と分析を試みたものである。インドネシアの美術史をふまえ、美術界に関わる主体である「美の生産者＝美術家」と、「美の消費者＝蒐集家」、また、美術活動を支援する主体に焦点をあて、創作するための感性、審美眼としての感性、美術作品と人を繋げるマネージメントの感性という、異なる役割をもつ主体間の、異なる視点による感性を考察した。

美の生産者の感性を考察するにあたっては、伝統絵画の画家(プルキス *pelukis*)、土産物屋で扱われる装飾的な絵画の絵職人(トゥカン *tukang*)、そして現代美術作家(スニ

マン *seniman*)という、職業名も、作られた作品の流通先も、自身の美術への認識も異なる三領域の制作者を事例とし、制作者と感性、制作者と「カネ(美術市場)」の關係に注目した。作品を売る前提で制作をする主体であるプルキス(画家)とトゥカン(絵職人)、一般にもたれている「神聖なる芸術家」というイメージに配慮

するために、美術市場での経済活動に消極的な主体であるスニマン(現代美術作家)、それぞれの制作者がどのように美術を捉え、美術と関わっているのかを、参与観察と聞き取りにもとづいて詳細に記述した。とくにスニマン(現代美術家)については、一人の作家のライフヒストリーを通して、美術作品の「生産と販売」という経済的なサイクルに身をおかねばならない美術家が、しかしそれでも美術市場の流行や需要に流されることなく、外的作用とは無縁に、湧き出る創作欲や感性を守りながら自らの求めるものを表現していく姿から、経済活動の一部という視点だけでは分析できない感性の領域を浮き彫りにした。

また、本論では、美を消費する主体である蒐集家の感性についても検討した。インドネシアには、美術家のパトロンの役割を果たしたといわれる従来の蒐集家「シニア・コレクター」と、現代美術の市場ブーム以降に現れた若手富裕層の新興蒐集家「アートラバー」といった、世代が異なり、蒐集する作品傾向やライフスタイルにおいては対照的な蒐集家が

存在する。本論では、それぞれが相応の感性をもちつつ、インドネシア現代美術をめぐる美術界を形成してきた歴史的過程と、そこから垣間みえる彼らの現代美術および広義の美術一般に関する概念を明らかにした。

これらの民族誌的記述をふまえ、本論はさらに、現代美術とはなにか、現代美術の社会的意味はなにかという点について検討した。そのため、インドネシア国家独立以前の美術から、現在多くの美術家が関わる現代美術のジャンルに至るまでのインドネシア美術史を、インドネシア人による初のインドネシア美術史総説ともいえる『インドネシア美術史』を基礎資料とし、インドネシアにおける現代美術の概念がどのように形成され、発展していったのか、同書で使用される用語に関する概念的検討を含めて記述した。加えて、近年現代美術の領域で議論となる「アートマネジメント」の実践についてもインドネシア現代美術の実践に照らし合わせて考察した。その結果、インドネシアの近代美術、現代美術というものが、西欧の文脈とは異なるものとして、それをつくる美術家達によって再構成されたものとして始まったことが明らかになった。美術家は、それぞれの時代に応じてオランダ植民地政府、独立以降のスハルト政権、商業主義を仮想敵として、自身のつくる美術を正当化し、常に民衆の立場に立ったインドネシア色の強い美術を創造してきた。しかしグロー

バリゼーションの影響で、つくる主体も買う主体も、インドネシアは世界の一部という意識に変化し、初期のインドネシア現代美術の概念は変容した。しかし、現代美術市場ブームが去った現在、美術界に関わる主体は、ふたたびインドネシア独自の現代美術を探究するため、かつての美術家の思想へ立ち返ろうとしている。また、ジョグジャカルタで開催される大型国際展「ART/JOG(アートジョグ)」を事例に、「アートマネジメント」という新たな概念とそれを行う主体による美術を介した経済活動が、それまでの画廊とは異なり、一般市民に開かれた文化的活動となっていた実践を描き、インドネシアにおける現代美術と社会との新しい関わり方を考察した。

本論は、1990 年代半ば 2010 年にかけて、インドネシア現代美術の現場で制作者として活動した経験をもつ執筆者が、美術作品をつくる主体、買う主体、美術を支援する主体という、それぞれに異なる感性をもった主体たちの活動と語り、主体間における諸関係の記述、考察をとおして現代美術とは何かという課題に迫ろうとしたものであり、これらの点で本論は、人類学における美術を対象とした研究に新たな視点と手法を提示した。